風の道

和田

風の道

昭和三十六年一月十六日　印刷
昭和三十六年一月二十日　発行

定価　二六〇円

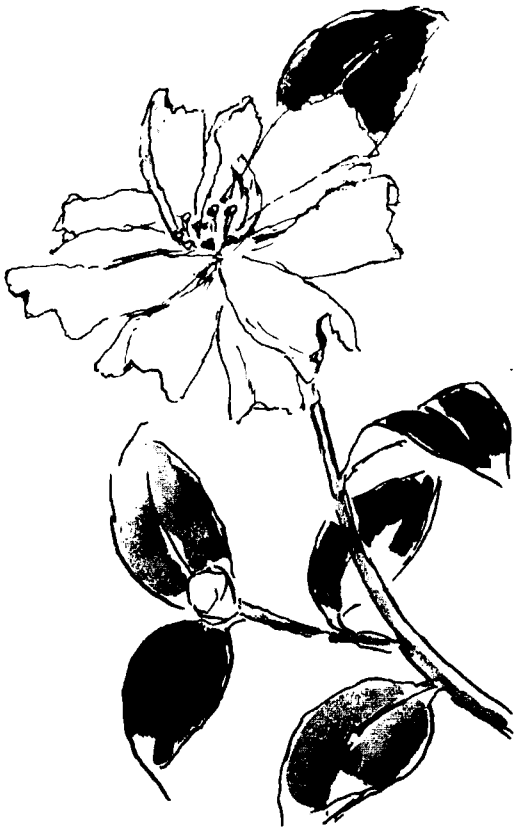
著者　和田傳
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(341)七一一一—九
振替　東京　八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

印刷・金羊社　製本・神田加藤製本所
© T. WADA 1961. Printed in Japan

風の道



和田傳

風(かぜ)の道(みち)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

——あら、それもまた優雅なのね。……正確には？
——「ヤエザクラ・ジャミソン・ビーレー」
——へーえ、どうしてあなただけそういう風雅な名前をおつけになるの？
——古ぼけた詩情でしょう。
クスッと昌治は笑ったようである。それは自嘲のようにも、また、何か劣等感でもはぐらかしてのようなものにも登美には見えたのは、やはり同じようなものを隠しているからだ。成績はよかったのに父親の急死で進学の希望も埋めて、卒業のあしたから百姓になったという彼の履歴は、はじめての会合のとき座長格の今田からきいていた。登美も旧制高女しか出ていない。
——いつか見せていただきたいわ。
しかし、見たってわかるものではないし、それほど見たいと思っているわけでもない。ただ、それほどの逸物でなくとも、せめて「ユキヤナギ」クラスの素姓の通ったコロが欲しいと登美は思うのである。
——きょうだっていいですよ。
きょうはもう遅い。みじかい秋の日はつるべ落しで、たちまち暮れ落ちるだろう。十月だが、きょうは春みたいにあたたかい気違い陽気で、旧町から駅前通りの新町へ出ると、オーバーをぬいだ勤め人の帰り姿がようやくにぎやかで、町へ出てきたという感じを登美は深くする。若い男と並んで歩けるのも町なればこそだ。
駅前新町の大通りがいまはこの町の繁華街になっていて、そこに今田農機具商会も旧町から移転している。これが座長格の今田の店で、会合がいつももたれるのはその住宅の方でだ。今田は旧師の最初の教え子で、すでに五十を越えていて、田舎俳人で、地元の俳人仲間の総帥でもパトロンでもあるとい

う風流人である。
——今日はあたし、ホント言うと、ティラーを見てゆきたいの。
店の前に来たとき登美が言った。百姓はみなテーラーと言っているのに、ティラーとはっきり英語の発音で登美は言っていた。
——ティラーをお買いになるんですか?
昌治も英語の発音をした。ティラー型自動耕耘機のことである。
——その相談にならぼくも乗れますよ。……四年ほど前から、誰もまだティラーとも言わない頃から手がけてますから。
しかし、豚を見たいと言い、ティラーを見ると言い、男の言うようなことばかり言うこのひとが、未亡人であることも昌治は知らないでいる。
——主人なんてないのよ。……未亡人、シタタカもののゴケよ。
フフンと登美は笑ってみせ、少しどうかしているなと自分を眺める余裕はあった。しかし、それもいいさと言いきかせたりする。山襞に狭く翳ったむらを出てきて、こういう会合がかさなれば、これくらいの解放感はいいだろうと言いきかせている。
いろいろなメーカーのいろいろな型のティラーが、目白押しに並んでいるなかに入って、あれこれ昌治の説明をきいているところへ、商売熱心な今田がもうジャンパーに着換えて単車でやってきた。
——いよいよハラをきめましたか?
今田はもうさきほどの委員長の顔でもない。また市の教育委員でも俳人の顔でもなく、敏捷で強引な商売人の顔になりきっている。
——あすにもお届けしましょうかね。

――いいんですよ、まだ急がなくても……
登美のうろたえに今田はお構いなく、おッかむせるように、
――届けますからね……届けちまえばそれでOKさ……
きいていて昌治は笑い出した。客の一人々々ははじめてでも、今田はしょッちゅうこんな風な口をきいて、その通りにやっているのだろう。昌治のときもそうであった。青筋たてる母親にはお構いなしに今田はさっさと機械を運びこんでしまったものだ。まだ耕耘機とも言わない頃のことだったが、それで結構片付いて、剛毅な母親も大して喚き散らすでもなくおさまったものだ。
しかし、このひとはシタタカのゴケだと自分から言っていたのに、それでいてこんな風にためらうのは、あるいはなお輪をかけたシタタカものの姑でもいるのだろうかと昌治は想像してまた笑っていた。
今田商会から駅はすぐだ。登美は駅前からバスに乗るつもりだし、昌治は自転車預り所にオートバイがあずけてある。
駅前へ出ると、登美は急にそんな気になって、
――少し休んでゆきましょうか……
と、誘い、先にたって食堂へ入って行った。
登美はそこははじめてだが、昌治はよほどの馴染と見え、女たちがその姓まで知っているのは意外である。
――ずいぶんお顔がひろいのね。
――ここへはよく友達をつれてきますから。……家ではメシも出せませんから、ここまできて一緒に食うことにしてるんですよ。

――へーえ、どうして家では出せないの？
昌治は笑って、家では母子ふたり暮しだが、母親はもう七十婆さんで、客に出す食事などつくれないのだと説明する。
――「四十八の恥カキ子」ってのがあるでしょう。
登美が誘ったのに、食事はさっさと昌治があつらえた。店にはもう灯が入っている。客をつれてきてここで食事をするということでは、同じ百姓でも町に近いとこうまで違うのかと思ったり、このひとは普通とは違うのだろうかと登美は思ったりする。
普通とは違うのだろうと思うことは、この若さで「ユキヤナギ」にもまさる逸物を育てていると知らされたときからでもある。
――お話の「ヤエザクラ」って、そんなにすばらしいんですか？
やはりそのことになる。
――まあね……それよりも、「ユキヤナギ」が近いうちに産むんですがね、お飼いになるならそのコロを分けてあげてもいいですよ。
と、昌治が言ったのに、登美は箸をもつ手を落して見返し、
――でも、あたしのような素人に、それこそ、何とかに真珠だわ。
登美は思うだけで顔いろに出したおぼえもないと思うが、それが出てしまったのだろうか、それとも、若いひとの好意はそれほど直線的なのだろうか、それはどうでも、こうなったらありのままがいいと思い、昌治がかさねてコロをくれようと言うと登美は貰うと答えてしまった。豚舎はどんな風だと昌治がたずね、それはまだ建ててない。先ごろ山から木を伐り出したところだと登美が答えた。山から木を伐り出したところだ、には昌治がたまげた顔になり、そこで山の話に、木の話になったり

した。

——また近いうちに伐ることになりそうよ。こんどは少しハデに。……ティラーを買うことになると……

——いいですね、さアともすれば山を伐ればいいなんて、いいなあ。

——先祖を食うことね……ゴ先祖のおかげッてことなのよ。だから仏壇の位牌にはあたまがあがらず、家あって人はないのよ。農地改革もほとんどなかったようで、家族制度は貧乏ゆるぎもしないのよ。それでもあなたはいいなあとおッしゃる？

——いいですよ。現に奥さんなんかそういうことを言うひとになってるじゃないですか。

昌治の言い方にはどこか余裕があって、登美の方にかえってそれがない。登美ははじめて相手におとなを感じ、ふっと男を感じて眼をそらした。

登美は少しいやな気がした。……こんなことッてあるはずがないと思ったり、こんなことでどうするんだと思ったりするが、そんなにムキになるほどのことじゃあない、と、また巻き返し、結局、再び相手へもどした眼は前より澄んできたようである。

そんな眼になってまた話しこみ、三十分間隔で発車するバスを二本もやりすごしていた。

二

登美は七時のバスに乗った。最初のときは五時、二回目は五時半だったと思い出しながらうごき出した車窓から広場を見ると、オートバイを片よせて昌治が手を振っていた。登美は慎ましい会釈でそれにこたえ、ふっとまた男を感じたが、このたびは眼をそらすひまもないうちに視界は遮られた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

バスはしばらく平野をはしり、それから台地の畑作地帯に入る。厚木で相模川に合流する中津川の右岸に隆起する台地である。その台地がしだいに狭まって丹沢山塊のふところに分けて入る辺が登美のむらだ。

この時刻のバスの客は終点の町に行くものばかりで、登美は車掌に声をかけてとめてもらって降りた。

神社か寺でなければないような大欅がそそりたっていて、登美の家は夜目にも遠くからそれとわかるが、それが今夜は、遅れた帰りを悔むかの女にはひどくいやな形相に見える。

だいたいこの大欅が、姑の志津には自慢の家宝でも、登美にはおもしろくない存在である。

近郷でこれほどの欅の大木がある家は他に一軒もないのは、戦争中強制的に伐らされてしまったからだ。戦争も絶望的な末期に近づいていたころのことで、欅は船材として強制買上げとなり、旧家の巨木は片ッ端から倒されてしまったが、たった一本残ったのが登美の家ので、それは運よく残ったというのでも何でもない。志津が伐らせなかったからだ。いまとなっては、志津がからだを張って守りぬいたタカラである。

地方事務所と県木（けんぼく）（そのころは木材業者も県単位に統合されていた。）の人たちがやってきて、大木はのこらず台帳に載せ、伐採計画をたてた。国家命令による強制買上げである。いやも応もない。一言の抗弁をするものもなかったなかに、たったひとり志津は両手をひろげて欅の前に立ちはだかり、県木のひとたちを寄せつけなかった。さすがに志津もどこまでも伐らせぬと言い張るのではなかったが、息子が出征中であることを言い、戸主である息子の留守の間に伐ることはならぬと言い張ったのである。それを言い張り、わめき、罵り、大欅にへばりついて離れようとしなかった。

ウチでは戸主であるひとり息子さえ供出している。この上供出すべき何ものもあるはずがないと志

津は突ッ張り、そばで登美はハラハラしオロオロするばかりだったが、結局あとまわしとなって県木のひとたちは次のに移ってゆくしかなかった。志津はそのとき五十にもなっていなかったが、近郷の大木が悉く倒され、最後にまたこの木の番になってもなお譲らず、「非国民」と罵る県木のひとたちに、非国民がかけがいないひとり息子を供出するかとやりかえし、伐るなら欅より先にこのあたしの胴ッ腹にその鋸を入れろと言い放った。無知な老婆があられもなくわめきたてるのではない。旧制の実科高女も出ている、まだ子供も生める女のそのすさまじい形相は、いまだに登美の瞼に灼きついている。地方事務所では何度も顔を換えて迫ってきたが、そのヤッサモッサの最中に終戦となったものだ。

庭先にそびえるその大木を見ないという日は一日もない。見ればサカサになってもあたしなどにできることじゃなかったと登美は思わずにいられない。

登美は姑と嫁の関係を、幼いころよく見た雄鶏の蹴合いになぞらえていつもニガ笑いをする。雄鶏同士は、最初の蹴合いで勝負がつくと、その勝者と敗者の位置はそのまま変ることがないようで、たまたまその最初の蹴合いで負けたのが若鶏で、勝ったのが老鶏なら、その後若鶏は強くなり、老鶏は弱くなるという場合もあろうに、その強くなった方が、弱くなっている方にもういちど勝負を挑むということはないようだ。いつになっても最初の敗者は、勝者の姿を見かけただけで尾を垂れて逃げてしまう。

嫁は、姑と蹴合いをするというのでもない。する前からきめられている位置である。そのうえ登美の場合は、姑の志津も二十代のなかばから後家を通してきたシッカリものときていた。

しかし、志津はもう六十になっている。独りを通してきたせいか年よりは若々しいが、体力はそうはゆかず、登美なしには農耕の日は廻せない。シッカリもの、シタタカものとヒトは言うが、登美に

はそれらを賢さで包んで滅多には見せなくなっている。この姑と嫁は、後家同士庇い合い、たより合って力を合わせるしか家を守れないことをたがいに知り合っているからだ。登美なしには農事は廻せないが、志津なしには世間から家は守りきれない。たとえばこの大欅にしても、供出の際六百五十円という買上価格を示されたことはいまだに登美も忘れないが、今日では百万近いと評価されている。

違うのは志津は家を守ってそのほかはなく、登美は希望を長男に託しているということだろう。その長男は父の顔も知らず育ち、来春には高校にすすむはずである。

——おそくなりました。……

と、声をかけてから登美は暗い土間に踏みこんだ。早くともおそくとも、そう声をかけてから土間に踏みこむのが習性のようになっている。

志津がひとりで炬燵でラジオをきいていた。孫の勉強にさわらぬよう奥の勉強部屋の襖は閉めきり、ラジオは低音で聴く心づかいは正しい姑である。いつもより炬燵の火も強いのは登美のためであるにちがいない。

そのあたたかい布団のなかへ足を入れると、先手をとるつもりもあって、

——きょうは、お母さん、ニュースがあります。海老名のかたと近づきになりましたが、そのかた、うちの親類の新関さんのすぐ近くのひとで、とても親しくしてらッしゃるそうなんですよ。

と、登美が言うのは、バスの中でなんども予習してきたことである。

食事をしながら、昌治のむらを訊ねたりするうちそのことがわかったのである。親類といま登美は言ったが、じつはつきあいは絶えており、どうして絶えているのかも登美は知らないような家でしかない。

——へーえ、……あの辺も変ったろうな。もう何年にも行ったこともないから……

志津は、はたして、ねッから気もなさそうなナマ返辞しかしない。
——でも、割りと濃い親類なんじゃありませんか？
——新関かね……でも、代がわりしてるもの……
その新関の当主と志津とはイトコ同士であり、そのひとがその家にいようといまいと、息子夫妻が現にいることだし、つきあいをしないというはずはない間柄である。その息子と登美の亡夫とはハトコ同士になるはずだ。
新関の当主はいま静岡市で弁護士をしており、そのイトコとも志津はつきあいをしていない。そのひとからは年賀状は欠かさずにきて、賀状のほかはきたことはないが、登美がそのひとのことを志津に訊ねたのは弁護士という肩書からで、それに対して志津はただむかし山のことでセワになったひとだと答えたばかりで、イトコにあたるひとだとおしえたのは何年かのちのことであった。
その新関家には志津の父の姉が嫁いだときいている。志津にはそのひとは伯母だったし、志津の一代はまだまだつきあいをおろそかにはできない親類のはずだ。
——新関さんのいまのかたは西高校の化学の先生なんですッてよ。
——そんなはなしだね。……あたしもウワサにきいているだけだったけど……
相変らずのナマ返辞でも、機嫌をわるくしているのではなさそうで、菓子の罐などもってきて登美に蓋をあけさせる。
——女は損だな……　嫁方の親類なんかとはロクなつきあいはしないもんだよ。……　とくにこの家ではそうだった。……
昌治の話では、その新関家も当主が弁護士になって出てしまったので、老人の死後は長いこと無住のまま閉められていて、いまのひとが西校の教諭に赴任してきてまた住みだしたということである。

だから海老名とはそのあいだにつきあいが絶えたとしても、静岡としないのは登美には腑に落ちない。

——お母さんは海老名へはもう何年くらいいらッしゃいません？

——そうさね、もうカレコレ二十五年くらいになるかな……　だからすっかり変っちゃってるだろうな。

——あたし近いうちに海老名へ行くことになるかも知れません。新関さんへじゃないけど、そのかた、すぐ御近所だそうで、西校では新関先生に教わったそうですよ。

そこで「ユキヤナギ」のことになり、「ヤエザクラ」のことになって、コロを譲って貰うことにしたことなど話すころには、まるで準備会の席でのように弁も立ってきて、遅い帰りの負い目もすっかり消えていた。

二十五年にもなるといまきいて、それならちょうどいまの自分の年ごろだったとかぞえ、そのころの姑は自分などよりもっと若くて美しかったろうなどとよけいな想像をめぐらしたりするのも、登美には例のないことで、いま大欅の下をくぐってきたひととも思われない。

——世間へ出るのもいいことですね。

それを姑がどう受けとめるかを考えるでもない。

——こんどの準備会はよほどおもしろそうだな？

——およそつまらないのは女の集りですわ。

それはいまはじめて言うことではない。

だから女学校の同級会や校友会へは渋々出かけては行くが、もちかえってくるものは不機嫌だけである。進学したひとはいまは会社や官庁の部課長夫人になっており、話すことはクルマやキモノや旅

行や温泉のことなどで登美にはとりつけないし、それでいて五年間首席で通したということでおかしな立て方をされるのも片腹いたい。そんなひとばかりが出てくる会で、話してみたいと思うようなひとは出てこない。

女の集りといえば地域婦人会へも近ごろは顔を出すこともないのは、これはまた逆に女学校出だというのでまつりあげられたりするのもアホらしいからだが、それよりも婦人会というのは亭主があっての婦人というものの集りで、亭主がわりをつとめている登美には一緒になって亭主の横暴をコキおろしたりするヒマもない。

――そこへゆくと準備会など気もちのいい集りですわ。

――そうらしいね。……会ごとに帰りがおそくなる……

――信之も西高へあがれば新関先生のおセワになることですし、新関先生とお近づきになってもいいでしょう?

と、負けていず粘ってみせるのも例のないことである。

志津はそれには答えないで、台所へ起って行ったと思ったらお茶をいれてきた。これもめずらしいことである。しかし、それも何か自然でない、はぐらかすような意図を隠した所作のように登美には見える。

・そのうちに志津はべつのことを言いだした。

――町の方ではもう犁きだしてるだろうな?

麦を播く前の田や畑の耕起のことを言うのは、それが主婦農業にとってのいちばんの関心事だからで、かくべつの意図があってではなかったろう。しかし、登美には待っていたような言いがかりである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.